

儒教文化が日本の大学教育に与えた影響に関する一考察

山口県立大学学長 長坂祐二

1. はじめに

日本に論語が伝えられた時期は明らかではないが、5世紀頃に朝鮮半島を経由して伝えられたといわれている。日本は古代より、社会制度の整備、発展ばかりでなく、価値観や人生観においても儒教文化の影響を強く受けきた。本論文では、儒教文化が日本の大学教育に与えた影響について、教育の重視、合理的思考の重視、行動の重視、という3つの視点から論じ、今後の大学教育改革の方向性について考察する。

2. 教育の重視

(1) 武士の子弟の教育

日本人は、人間形成において教育が大切であることを儒教文化から学んできた。日本では、古代より江戸時代まで、海外の進んだ学問を、中国語に翻訳された漢文の形で取り入れてきた。漢文を読み書きできることが、当時の知識人にとって必須の教養であった。特に、江戸時代では、儒学が幕府の正式な学問として取り上げられ、当時の支配階級である武士の基本理念となった。武士の子弟を対象にした学校である藩校では、「論語」や「四書五経」などの儒学が講義された。後に、新渡戸稲造は、「武士道」が儒教思想の核心である仁、義、礼、智、信の五常の影響を強く受けて形成されたことを、世界に紹介した¹⁾。

(2) 庶民の子弟の教育

一方、江戸時代の社会制度は、「文字」の使用を前提として形作られたことから、武士以外の庶民においても文字を読み書きができることが求められた²⁾。そのため、日本中の町や村に至るまで、庶民の子弟のための教育機関である「寺子屋」や「手習塾」が普及した。そこでは、「論語」がテキストとして広く使われたことから、庶民の間でも、「論語」は一般教養として受け入れられてきた。

(3) 教育による人間形成

儒教では、礼儀作法や道徳は、先人によって培われてきた伝統を学ぶことによって、はじめて身に付けることができると考える。論語に、「性、相近きなり。習い、相遠きなり（性相近也、習相遠也）」³⁾とある。これは、人は生まれたときは大きな差はないが、学ぶことによって成長し、大きな差が出てくることを意味している。また、「教えありて、類なし（有教無類）」⁴⁾という言葉の通り、誰もが平等に教育によって成長できることを示している。武士の子弟も、庶民の子弟も、このような言葉に接しながら学習する環境が整っていたことから、教育を重視する日本人の国民性が形作られ、現在まで引き継がれてきたと考えられる。

3. 合理的思考の重視

(1) 「格物窮理」

明治時代以降の科学技術の進歩や経済発展の背景に、合理的思考を重視する儒教文化の影響があった。江戸時代以来、日本の教育では、「読み、書き、そろばん」で表現される実学に重点が置かれてきた。「そろばん」とは計算するための道具のことであるが、広義には「数学」や「経済学」のことを指す。四書の一つである「大学」には、「知を致すは、物に格るに在り、物に格りて知に到る（「致知在格物、物格而知至」）」⁵⁾とある。知識を深めるためには、物事の理や本質を論理的に深く追求することや、段階的に事実を解明することの重要性を説いている。このような考え方は、西洋で発達した自然科学的な考え方に通じるものがある。

日本では、儒教のテキストを使って実学を教育してきたことから、実学の知識を身に付けることを、単なる実用の道具として手に入れるのではなく、真理を追究するための学問として取り扱ってきたところに特徴がある。花を生けることが「華道」になり、お茶を飲むことが「茶道」になったように、日本

人は、あることを学ぶことは、その道を窮めることであると考えようになった。このような精神性の背景を持ちながら、実学を学ぶことに慣れてきたことが、明治時代以降、西洋の科学技術や経済システムを受け入れ、日本に適した形で工夫、発展させることができた素地になってきたと考えられる。1960年代に実現した高度経済成長は、教育を重視する国民性と、実学と真理追求を結び付ける合理的思考が背景にあって、はじめて成し遂げられたことである。

4. 行動の重視

(1) 伝統的教育観の崩壊

現代の大学教育においては、伝統的教育観に基づく教育が成り立たなくなっている。日本が高度経済成長期にあった1960年代は、まだ大学進学率は10%程度であった。当時の大学の役割は、特定の分野の知識・技術を有する専門家あるいは研究者の育成が主体で、社会のエリートを養成することが主な使命であった。そのような時代の大学教育は「何を教えるか」という教える側の発想が重視され、教員は自分の経験をもとに専門的な知識と技術を教えることが伝統的教育観の基づく教育が中心であった。

1970年代になると、大学進学率は30%を超え、大学進学のための目的が専門家や研究者でなく、はっきりした目標を持たない、いわゆる「モラトリアム」で進学する学生が増加してきた。そのような時代の大学は、社会に出る前の様々な経験をする場と考えられるようになり、専門的な知識と技術を身に付ける場としての大学教育が軽視されるようになった。その結果、日本の大学生は、世界でもっとも勉強しない大学生であるといわれるようになった⁶⁾。さらに、2000年代になると、大学進学率は50%を超え、いわゆる「ユニバーサル化」が進行する中、大学に入学してくる学生の資質も学力も目的も多様化し、従来の価値観に基づく大学教育を実施することは不可能になった。これは、日本が儒教文化から学んだ教育の重視、合理的思考の重視という伝統的教育観に基づく教育の基盤が崩壊したことを意味している。

(2) 新たな教育観の必要性

複雑化する社会の変化は、職業の細分化をもたらしたが、現在はその弊害が問題になっている。社会が大きく変化する中、特定の分野の知識と技術だけを身につけた専門家を養成するだけでは対応できなくなっている。このような状況を改善するために、異なる職域の人とコミュニケーションする能力、課題を発見し解決する能力、チームで働く能力、主体的に行動ができる能力、経験したことのない状況に適切に対応できる能力など、汎用的能力を身に付けることが求められている。そのような時代に対応した大学教育を構築するため、新たな視点による大学教育の見直しが必要になった⁷⁾。

(3) 「知行合一」に基づく教育プログラムの創造

論語に、「先ずその言を行って、而して後、これに従う（先行其言、而後従之）」⁸⁾という言葉がある。また、伝習録には、「知は是、行の始にして、行は是、知の成なり（知是行之始、行是知之成）」⁹⁾とある。行動を伴わない知識は未完成であり、行動することによって知識が完成することを表す「知行合一」の考え方は、体験を通して実践的に学ぶことを重視した現代のアクティブ・ラーニングの考え方に通じるものがある。これからの大学教育は、「何を教えるか」という教える側の発想から、「どのように学ぶか？」という学ぶ側の発想に転換する必要がある。大学教育における教員の役割は、教員が持っている専門的な知識と技術を単に伝達することではなく、学生自身が興味を持ち、学習し、そして身につけていく過程を支えることに転換する必要がある。教室の中で身につけた知識を、教室の外で実践することを通して完成させるところまでを教育プログラムとしてカリキュラムに組み込むことが、これからの大学教育の重要な課題になることは明らかである。行動することを重視する儒教文化が、大学教育の新たな視点として、今後、ますます重要になると考えられる。

5. 終わりに

最後に、論語の「晏平仲は、善く人と交わり、久しうしてこれを敬す（晏平仲、善與人交、久而敬之）」¹⁰⁾という言葉を挙げる。国際交流の第1歩は、お互いをよく知るということであるが、交流を深めることを通じて、お互いに尊敬できる関係になることが重要である。本論文は、曲阜師範大学60周年記念式典において開催された「学長フォーラム」における講演に基づいて執筆したものである。山口県立大学と曲阜師範大学が、そして日本と中国が、お互いに、さらに尊敬できる関係になることを祈念して、私の考察を終える。

引用文献

- 1) Inazo Nitobe、「BUSHIDO: The Soul of Japan」(1900)
- 2) 井出草平、「江戸時代の教育制度と社会変動」四天王寺大学紀要、57、207-223 (2014)
- 3) 「論語」陽貨第十七
- 4) 「論語」衛靈公第十五
- 5) 「大学」
- 6) 辻太一郎、「なぜ日本の大学生は世界でいちばん勉強しないのか？」東洋経済新報社 (2013)
- 7) 中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて(答申)」(2008)
- 8) 「論語」為政第二
- 9) 「伝習録」
- 10) 「論語」公冶長第五